

チャド南部における 農民と金銭の関係

坂井真紀子

はじめに

サハラ以南のアフリカ諸国では、さまざまな地域開発の試みが行われている。なかでも小口金融プログラムは貧困撲滅のための重要なツールとして国際的な注目を集めている。そこには、大きく分けて二つのアプローチがある(Gentil et Fournier [1993: 67])。一つは、ドナーが資本を用意し、希望者の申請を受け融資を実施するもので、さまざまな地域開発プロジェクトのオプションとして用意されることが多い。もう一つは、利用者の貯蓄を先に募り、資本が蓄積された後に融資サービスを実施するという、持続的なシステム作りを主眼に置くものである。両者とも、金銭を生産的な活動に投資し、利益を上げ、余剰をさらに投資に回すというサイクルを定着させ、貧困層の現金収入を向上させることが目的である。その考え方の根底には、現金への信頼、節約や貯金に対する好ましい評価が自明のこととして存在する。しかし実際には、現場における返済率の落ち込み、責任者

の使い込みなどによるプロジェクトの閉鎖といった報告が後を絶たない^{†1}。援助者側は、利用者に金銭管理のノウハウが不足していることを失敗の主な原因としてあげる。だがそれ以前に、援助者側と受け手は、金銭に対する価値を同じ文脈で分かち合っているのだろうか。地域に生きる人々がどのように金銭と関係を結んできたのか、歴史・社会的背景をふまえて分析する試みは、小口融資のアクションとその結果を理解するうえで必要不可欠と考える。

筆者は、多様な価値観が浮き彫りになる開発の現場をベースに、チャド南部における地域住民組織の実態を研究しているが、2004年に現地調査で訪れた石油プロジェクト地域の様変わりには衝撃的であった。土地提供に対する補償金の支払いと、世界銀行(以下、世銀)による住民への小口金融プ

†1 チャドではここ数年の間に、マイクロクレジットの団体が相次いで破産、撤退している。(Tchad solutions, COOPECなど)

ロプログラムが同時に行われ、巨額の資金流入が地域経済を根底から揺るがしている。本稿では、まず石油プロジェクト地域における小口融資の状況を概観したのち、地域住民のお金の使い方について考察したい。さらに、貯金がチャド南部の農民たちに歓迎されない理由を分析しようと思う。

1. 石油プロジェクト地域の現状

チャド南部のロゴン・オリエンタル州コメでは、2000年より世銀の出資により石油開発が始まった。エツソを中心とする石油会社のコンソーシアムが、パイプライン建設地の提供に対し、個人に補償金を支払うほか^{†2}、村への補償として学校や井戸の建設などを行っている。世銀は、石油プロジェクトと抱き合わせて貧困撲滅を目標とした地域開発プログラムを実施しており、その目玉は現地NGOを通じた小口融資である。しかしながら、落とされた巨額の資金を、地元が受け入れる準備はできていない。市民団体CPPL(Commission Permanente Pétrole Local)は、地元住民の金銭管理講習などの準備のために、石油プロジェクト着工を2年間遅らせるよう世銀に要求したが、着工を急ぐ石油会社の圧力のため要求は退けられ、プロジェクトは2000年に開始された(Petry et Bambe[2005:148-151])。実際、世銀が提供するクレジットの返済率は40%前後で、返済不能に陥るケースが後を絶たない。ある村の女性グループは、300万CFAフラン(約60万円)の融資を受けて、製粉機と発電機を購入したが、同じ村内に製粉機

で商売を始める人が増え、顧客が激減した。残った借金を他の収入で埋めるには金額が大きすぎ、メンバーは頭を抱えている。

ロゴン・オリエンタル、オキシデンタル両州の主要民族は、「宵越しの金を持たない」ことで有名なサラ・ガンバイ(Sara-Ngambaye)の人たちである。ここを主な活動地とするASDEC(Association pour le développement d'épargne et de crédit)は、世銀の融資プログラムの利用者への研修を担当した。責任者は、「きちんと貯金して、生産性のある活動に投資すればさまざまなことが実現可能なのに、みんなお金の使い方を知らない。このメンタリティを変えていくことが、貧困を撲滅する鍵



†2 2004年までに約29億CFAフラン(約5億8000万円)がチャドの地域住民に支払われている。(<http://www2.exxonmobil.com/Chad/People/Compensation>)

だ。」という。しかし、世銀のプログラムは期限内の予算消化が最優先され、返済された現金の利用に関する長期計画は一切ない。ASDECの活動方針は、利用者の貯金を元に融資を行い、外部支援を入れない持続的な金融システムを作ることであるが、実際には、利用者の不払いに苦しんでいる。ASDEC自身、世銀のアプローチを批判しながらも、その資金を当てにせずには運営不可能な状況である。なぜ、こうしたシステムは地域に根づかないのだろう。貸す側の問題として、ノルマ消化主義のため、農民の経済サイクルやその脆弱性が無視されているという批判がある。確かに、世銀の一方的な貸付に地域が翻弄されていることは事実である。一方、受け手側のロジックはどうであろう。歴史を遡って農民とお金の関係を問い直す視点は、単なる技術論を越えて地域に一步踏み込んだ議論を可能にすると思われる。



2. 農民のお金の使い方



チャド南部は、かつてフランス植民地政府から「使えるチャド(Tchad utile)」と呼ばれ、農業収益のほとんど見込めない砂漠・半乾燥地帯の北部と区別された。比較的豊かな降水量と肥沃な土地をフランス本国の利益のため最大限「利用する」手段として、綿花栽培が強制的に導入された。さらに、税金徴収を現金化するため、貨幣経済システム(現在のCFAフラン)もその時に初めてもたらされた。

植民地以前の社会では、鉄片の伝統的な貨幣ラール(*lar*)が存在した。この貨幣は、アニミズム信仰の諸儀礼をつかさどる長老にささげられる。この貨幣は長老の権力を象徴するが、実際の流通にはあまり関係がなかった。長老たちは特別な待遇を享受する代わりに、緊急用の穀物庫を用意し、

常に穀物で満たす必要があった。村人たちは個人の畑の使用権を受ける代わりに、長老の畑を耕したり、自分の収穫の一部を納めたりした。食糧不足の時には、長老は村人にそれを無償で分配する義務を負っており、気前のよさが長の資質を測る目安であった。一般の村人たちは、長老の穀物庫へアクセスできる限り何の心配もなかったが、植民地時代に綿花の強制栽培が始まると、それまでの農業システムが破壊され、穀物庫を満たす余力がなくなって、生活は不安定化した。

CFAフランは綿花栽培者の手を経て、地域の市場に流通するようになる。植民地政府は綿花栽培の推進と税収向上のため、農民たちの購買意欲を駆り立てた。市場の設置を奨励した結果、北部のイスラム商人がもたらす砂糖、お茶、衣類などの商品が南部に浸透していった。かつて祭りに供された地酒は、女性たちによって日常的に販売され、農民たちの日々の楽しみとなった。また綿花栽培に必要な農薬、化学肥料、農具などをクレジットで農民たちに購入させたので、農民は常に借金を抱えるようになった。

村の市場で売買されている商品の値段は25 CFAフラン(約5円)が大体最低の金額だ。そこでやり取りされる金額は200 CFAフラン、500 CFAフランなどで、大きな紙幣(5000 CFAフラン、1万 CFAフラン)を目にすることはまずない。農村部の住民の多くは、野菜や魚などを売って小銭を稼ぎ日々生活を営んでいる。こうした小額の収入は、その日のうちに夕食のソースの材料に消える。その小銭さえない場合、知り合いから野菜や油などをツケで買う。誰もが誰かにツケがあり、慢性的赤字体質の家計を抱えている。このサイクルの中に、貯金する余裕はまったくない。

チャドでは綿花栽培が現金収入のほとんどを占めるというイメージがあるが、実際には農民の経



済活動は多様で、全体における綿花収入の割合は約40%にすぎない。それでも、綿花がもたらす収入は、まとまった現金を手にする点で性質を異にする。国営会社コットンチャドの支払いの日は、大きな市が立ち、地域が一番華やか時である。農民たちは、この日に綿花収入の約80%を使い切るといふ。1965年の統計調査(INSEE[1969])によれば、当時の使い道の内訳は、税金の支払い(27%)、衣類購入(20%)につづき、借金の返済が11%にのぼる。冠婚葬祭や贈答などの交際費にも多くを費やしており、食費などは7%にすぎない。その後同様の調査は行われておらず、現在に至るまでの変化を数字で把握できないが、30年以上たった今も、綿花に代わるまとまった収入源は見い出されていない。筆者の聞き取り調査^{†3}では、綿花栽培を続ける理由として、「税金を支払うため」という人が圧倒的に多く、次に65年の調査にはない項目であるが「子供の学費」と続いた。貯金をするという人は皆無であった。



3. 貯金と借金そして豊かさ



なぜ農民たちは貯金の習慣をもたないのだろうか。まず、貯蓄に対する根深い不信がある。チャドは1960年の独立以来、約30年にわたる内戦を経験してきた。村が紛争に巻き込まれれば、蓄積していたものは現金であれ穀物であれ、必ず略奪される。そうした経験から、あるものは使い切るという習慣が染みついている。

次に、貯金や節約に対するネガティブな社会評

価があげられる。先進国では、節約や貯金は美德だが、チャド南部では、むしろ「自分のことしか考えていない」「けち」というマイナスの社会通念が非常に強く、個人で富を蓄積し、成功者として突出する人に対する嫉妬や憎悪はすさまじい。皆、村八分になるリスクを冒してまで「金持ち」にはなりたくはない。逆に、困難な状況にある親戚や友人に余剰を振る舞い、使い切る気前のよさは非常に評価される。人間関係に投資し、社会保障を構築することが重視されるのである。

また、商人などが提供する地元のさまざまな融資サービスを利用できることから、貯金の必要を感じないことも指摘できる。市場で野菜の小売りを営む女性たちは、卸売商から商品を借り受けて商売し、1日の終わりに売上げから借りた分を支払う。イスラム商人はコーランの教えに従い利子を取らない。お礼という形で返済額に上乘せして返済するのが習慣だという。一方、フランス政府から年金を受けている退役軍人からは、高利だがその分高額な借金が可能だ。農民たちは、手持ちのお金がないときは、知り合いの商人や、仲間の農民からツケで買い物をする。サラ・ガンバイ語では、借金を表す言葉のうち次の2種類が代表的だ。一つは短期の借金を表す“ベレ”(明日)。「明日返すから、金を貸してくれ」という表現からきた。だが期限を守る人はいないらしい。もう一つは“クル”(寒い)。畑を耕す準備資金などの比較的長期の借金をさす。チャド南部では5月ごろ雨季が始まり、耕作準備の資金繰りが必要になる。この時期に借金をし、収穫が始まる11、12月のいちばん気温の低い時期に返すという約束からこう呼ばれるようになった。

農民たちは援助団体の融資サービスをフランス語で“クレディ”と呼んで、地元の融資サービスとはっきり区別している。彼らは、“クレディ”は

†3 2004年2月、ロゴン・オキシデンタル州キアチ村における綿花栽培者グループへのインタビューより。

使用目的が決められていて窮屈だと感じている。例えば、キリスト教団体は、女性の地酒造りを社会が腐敗する原因だと退け、複数の妻帯のための借金を、モラルに反する、非生産的だと禁止している。そのためなかには、団体の気に入る項目で借金をし、実際には結婚資金に使うなど目的をごまかすケースも多くある。また援助団体の多くが予算を消化することに重点を置き、借金の返済に関して寛容すぎるくらいがあり、農民たちも心のどこかで返済義務を問われたいと思っている。

農民たちは、実のところNGOなどの資金を「ラーレ・レ・ナッサラ」(Lar lé Nassara : 「白人のお金」の意)と呼ぶ。白人のお金は潤沢で尽きることがない。いくら使っても、返さなくても大丈夫。活動の内容にかかわらず、アクセスできるなら有効に利用しよう。それが共通認識だという。援助団体などに就職した人には、親戚や友人がどっと押し寄せ、借金の申し込みが殺到する。人々は、「白人のお金」に対して、植民地化以前の長老の穀物庫のイメージを重ね合わせ、再分配の恩恵を期待している。多くのプロジェクトが、利用者の不払いや責任者の使い込みによって機能不全に陥る背景には、かつて長老に依存していたと同じ心理が働いているのではないだろうか。

ある村の女性は、貧困を次のように定義した。「貧乏な人というのは、畑を耕す力のない人、助けてくれる友達のいない人。」彼らはお金を「ゴイゴイ(森の精霊)」のようなものだという。ゴイゴイは人の背中におぶさり、森の中で道に迷わせ、しばらくするといなくなってしまう。お金は数日で消えるはかないもの。それならば、あるうちに使ってしまうおうと考える。お金の所有は、かならずしも豊かさには結びつかない。近い人たちに酒を振る舞ったり、複数の妻を娶り耕作面積を増やしたり、子供を増やして労働力を増強するなど、

つかの間の収入を別の形に還元することで、生活の保障を行っている。土地があること、困ったときに助けてくれる人間関係、かつての長老の穀物庫であり今では援助団体へのアクセス権などが、多くの農民にとって豊かさの象徴となっているようだ。



結 び



サラ・ガンバイの農民たちの金銭感覚は、植民地化以前の長老との関係などを元に、さまざまな歴史的要因によって形成された。チャドの他の地域に比べ、植民地時代から宣教師や綿花栽培を通して外部の文化と接触をもってきたサラ・ガンバイの人々は、彼らなりに援助を受け入れるすべを身に着けたともいえる。長い内戦とそれに続く不安定な治安は、現金そのものに価値を与えなかった。略奪されない目に見えないもの(人間関係、教育など)に還元することで、彼らは生活の安定を図ってきた。

農民たちの生活とて、国際化の波から逃れられるわけではない。彼らの価値観も、社会内外の移り変わりとともに変化していく。だが、それはかならずしも画一的な貨幣経済の価値観に収斂していくとは限らない。石油プロジェクトの登場は、価値観を根底から揺るがし、「まるで火星人と出会ったような」^{†4}インパクトを地域住民に与えている。外国人と見ると、挨拶代わりに手の平を口に近づけ食べ物を要求する地元民の姿は衝撃的である。巨大石油産業と世銀が、学校や井戸を建設し、多額の現金を落とし、「我々が“開発”をあ

†4 Petry et Bambe [2005:9] プロジェクト地域の村ベドゴに駐在中だったドイツ人のNGO職員ベトリーの言葉。

なたたちにもたらしめます。」と約束する。国際レベルで設定された貧困指標が改善されたとして、精神面も含めた生活の質は向上するのだろうか。地域で増えたのは飲み屋と売春婦、そしてエイズだけだという、人々の悲観的な意見は無視できない。

貯金の奨励による持続的金融システムの構築という小さなNGOの理想は、農民の価値観と相容れず、巨大石油プロジェクトを前にして妥協を余儀なくされている。小口融資の技術的な議論を超えたところで、援助側と受け手が、金銭に対する異なる価値観を理解しあう可能性ははたしてあるのだろうか。今後チャド南部の農民たちは、お金とどんな関係を構築していくのか、その行方が注目される。

【参考文献】

Brown, P.E., Kruse, G. B., Smith, J. W. [1994] *Etude sur les femmes dans la commercialisation agricole, Tchad,*

N Djaména : AMTT, 84p. + annexes.

Gentil, Dominique, et Fournier, Yves [1993] *Les paysans peuvent-ils devenir banquiers? Epargne et crédit en Afrique,* Paris : SYROS, 269p.

INSEE (Institut National de la Statistique et des Etudes Economiques) [1969] *Enquête socio-économique au Tchad-1965,* Rép. du Tchad, Min. du Plan et de la Coopération, 333p.

Magnant, Jean-Pierre [1986] *La terre sera terre tchadienne,* Collection Alternatives Paysannes, Paris : l'Harmattan, 380p.

Magrin, Géraud [2001] *Le Sud du Tchad en mutation : des champs de coton aux sirnes de l'br noir,* Paris : SEPIA, 427p.

Petry, Martin, et Bambe, Naygotimti [2005] *Le pétrole du Tchad : Rêve ou cauchemar pour les populations ?,* Paris : Karthala, 415p.

Rodari, Riccardo [1998] *Réflexions autour du sens de l'argent chez les paysans du sud du Tchad,* Berne : DDC (Direction du Développement et de la Coopération) 27p. (Document inédit)

(さかい・まきこ / パリ第一大学IEDES博士課程)